

2000.5.4.

『島からのことづて』お送り頂き、本当に有難うございました。早速全体を通読して、教えられるところが非常に多くありました。私も永年おつきあいのあった伊谷純一郎さんについて、知らなかったいろいろな面を知ることが出来たのは、なによりの幸いでした。そんなにバスのなかでも原稿のチェックをやっておられたとは正に驚嘆。なお最近では放送大学でテレビ連続何回かのアフリカ特別番組を作って頂きました。それにしても今西さんをはじめとして、京大特有の霊長類学の伝統は東京で全く生れなかったと思います。動物学にしても、東京では、白衣を着て顕微鏡を覗いていなければ学問とは考えず、生態学は学問ではないといみかたが古くから動物学者の間では存在していると思います。そして京都大学の特色である「雑学的強さ」という側面には改めて感心いたしました。また伊谷さんは極めて気楽な服装で fieldに出られたそうですが、「百貨店」とアダナのついた貴方ほどではないにせよ、私は必要な参考書を多くかかえてfieldへ行くので、泉さんからは「祖父江君ライブラリー」とからかわれました。泉さんは国内旅行はどこでも肩掛けバのバッグひとつでした。

また泉靖一さん（厳密に言えば泉さんと当時都立大学助手であった私とが）北海道でアイヌの人達に叱られた時期について、私の発言を引用して下さり（p.25）有難うございました。日本民族学会によるアイヌ総合的field-workが行なされたのは1951年で、そのあとに杉浦健一、泉等によるアイヌ研究が本格的に始ったのです。

なお私が本格的に全国の高齢者の聞き書きプロジェクトを開始したのは1973(昭48)で農林水産省生活改善課（1980年に入って婦人生活課と改称、課長も係長もすべて女性というユニークな課）でしたが、もやは「改善の時代」ではないと「昔の生活の智慧」の記録収集を大きな事業としようということで、宮本常一さんを委員長、私を副委員長、これに石毛、米山、原ひろ子等々が加わって、北から南までの全国47都道府県各地の農林水産省生活改善普及員、生活改善指導員（すべて女性）の方々から十年にわたって、高齢者から失われた衣食住の聞き書きを行ない、十数冊の報告書が横行されましたが、80年代なかばで予算がなくなり立ち消えとなりました。宮本先生ご逝去のあとは私が委員長となりましたが、この事業でなにより嬉しいかったこととして全国各地の高齢者が喜んでくれたのは、すっかりなくなっていた伝統食が各地で復活したこと。しかしそれよりももっと喜んでくれたのは若者たちに話そうと思っても、うるさがって誰も聞いてくれようとしなかった昔のしきたり、若い頃の村ようすを普及員、指導員たちが熱心に聞き書きして、しかも活字にしてくれたということで、これはなんとも嬉しいことだったようです。ですから安溪さんたちの聞き書きもお年寄りたちを随分喜ばせる結果になったのではないのでしょうか？

宮本常一さんといえば有名な逸話があります。あるとき東京から和歌森太郎先生というたいへん偉い先生が村へお調べにくるということで、役場では大騒ぎして村の長老たちを大広間に集め、和歌森先生は床柱を背にしてドッカと座って「お調べ」が半日行なわれた。ところがしばらくして、若森さんよりもっと偉い、宮本常一という先生がその村にやってくると言うことになった。役場ではもっと大騒ぎで長老を大勢集めて待ったが、宮本先生はいくら待っても現れない。どうしたかと村中を調べてみた

ところ宮本先生は、既に村の畑に座込んで村の主婦の仕事を助けながら話を聞いていたということです（もつとも過日、宮本先生ご自身からその話の真偽を、たしかめてみたところ、細部はちよつと違っていて、実はそこは漁村で、宮本さんは浜辺で網のつくろいを手伝いながら村人とはなしをしていたところだそうでした）。（この話のあと、同じく東京から調査に来る先生にも随分タイプの違う先生がいるということが村で話題になったようです）。

宮本さんの農家への入って行きかたは「ヤア、景気はどうですかねえ」というような調子で、農業を自分も指導していたからできるんですね。えらいもんです。（それに引き換え、ご存じと思いますが、さきの和歌森教授は松本清張の『落差』でスカンキアルダル事件の大学教授主人公に描かれ、岡正雄先生も熟読していました）

なお218で「シタジ」とありますが、これは醤油の東京下町方言だとばかり思っていました（私は東京生れ）が違うのですか？。

またP.155には相手の「目を見て話す」ことについて記してありますが、実はアメリカでは黒人は相手に話しかける時には相手の目をジッと見て話しますが、相手の話を聴くときにはいつも目をみているわけではないのです、相手の顔を視野に入れているがジット目を見るのではなく、視線を時々横へそらし、また目をもとへもどす。これに対して白人のほうには相手の話を聴くときには相手の目をジットみつめます。あいだに話しかけるとときにはいつも目を見ているわけではなく、視線を時々横へそらし、また目をもとへもどして知手の顔を視野へ入れているが、ジット目を見るのではない。

このように白人と黒人には微妙な差があるので、白人に言わせると自分が話しているのに、黒人はこちらの目をちゃんと見て聴いていないと言い、これがまた誤解の元になるそうです。（以上はある言語学者の永年の研究成果ですが、同意するひが多ようです）

以上にながながと書きましたが以下にやや失礼とは思いますが御意見等々。

1) この本はすべて「です調」ですが、informantsのことばはもちろん、そのまま「です調」でよいのですが、その解説、しめくり等々は「である」調のほうがしつかり重みがあつてよかつたのではないですか。特にこの本に文をのせて貰つたひとびとは「程度の高い学術的な本でもあるのだな」ともう少し、嬉しさと自信とがたかまつたのではないかと感ずると思うのですがいかがでしょう。

2) 肩書きには「……教員」とありますが、このようにかいてあるかたがたは、時々あちこちにおられるようですが、これは「教授」など書くのはいかにも權威主義であり、あくまでも民主的に！ということで、大学でのとりきめですか？ あるいは個人の自由判断ですか？しかしその大学に属する以外の者にとって、著者ご当人が助教授くらいの若いのかたか、教授クラスの方なのかによつて、内容を判断する上にも体験の長さを知る上にも必要になってくるようにも感ずるのですが…、特に奥様のほうは「非常勤講師」として「非常勤教員」とはしていないのでちよと迷います。外国国とのcorrespondenceや、外国の本に載せる著者肩書きはどうされるのですか？

いろいろつまらないこと書きましたことをお許し下さい

ますますお元気ですばらしいご活躍を！

追伸 放送大学は2年前に定年、今は客員教授ですが今年4月から大阪堺市のプール学院大学大学院教授になりました。但し集中講義だけですから数週間行くだけです。放送大学は当分、客員教授です

。 祖父江孝男